

徳川慶喜の晩年

児玉 寛嗣

散歩コースのなかに徳川慶喜ゆかりの場所を通るコースが三つある。それぞれ、巢鴨ルート、植物園ルート、谷中ルートとしよう。

静岡に隠遁していた慶喜は江戸から改称した東京に戻って、明治三十年に居を構えた。既に六十一才になっていた。戻ってきた理由だが、老齢になり健康を気遣い良い医師の多い東京に行きたかったこと、その頃、屋敷に盗賊が入り財宝が盗まれいやけがさしたことなどが考えられている。上京すると参内するようにと促された。しぶしぶだが、慣例である大礼服でなく葵の紋の紋服を着て、かつては自分の城であった皇居にのぼった。どんな心境だったのだろうか。東京では気儘に余生を過ごし、大正の初めまで生き延びた。

巢鴨駅の前に「巢鴨に住んでいた徳川慶喜」と書かれた案内板がある。住居の敷地が現在の地図に囲んだ枠で記されている。駅前一帯を占めており、壮大な屋敷であったことがうかがわせる。邸内には故郷の水戸にちなんだ梅の木が多く植えられ、近所の住人からは「ケイキさんの梅林」と呼ばれて親しまれたという。しかし、ここに住んだのは、わずか四年間だった。屋敷のすぐ脇を鉄道（現・山の手線）が通ることになり、騒音を嫌って引越したのだ。

小石川植物園に向かってひたすら歩く。小高い丘の上、道路脇に「徳川慶喜終焉の地」という案内板が見える。巢鴨から越してきた屋敷跡には彼が住んでいた頃からあるという大銀杏の木がそびえている。水戸藩主斉昭の子として、小石川の上屋敷（現在の小石川後楽園一帯）で生まれたというから終焉の地が同じ名前を冠した小石川植物園の近くというのも何かの因縁か。

谷中霊園の奥まった一郭に墓所がある。大河ドラマで「慶喜」をやっていた頃は賑わっていた。將軍の葬式は家康以来、仏式で行われるのが慣例であった。しかし、その遺志により神道の形式をとった。墓は饅頭のような形をした特徴的なものとなっている。慶喜の死で江戸は過去のものとなった。